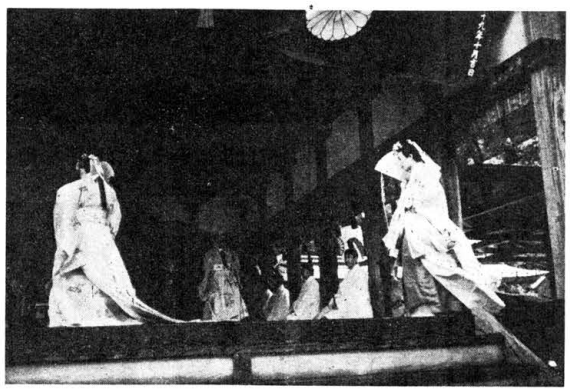
宗像

毎月一日発行
発行所　宗像大社
宗像社
福岡県宗像郡玄海町
電話玄海代③1311
定価一年送料共1000円

春季大祭盛大に斎行

―春雨に雅楽の調べ流れて―



境内の樹々の若葉が萌え、御本殿の朱色に一際色鮮かに映える四月の一日、二日、宗像大社春の大祭が厳粛に執り行われた。

三月三十一日御本殿、拝殿の御簾が新しく掛け替えられた。午後五時から高宮祭、六時から沖宮祭が行われた。

翌二日、午前十一時、斎館の大太鼓が打ち鳴らされ、斎館前庭に冠、斎服に威儀を正した神職と氏子会より推薦された奉幣使が手水を了えて列立し、この後に参拝の祝詞奏上。続いて地元青年団員志による当社伝統の風俗舞と女子中学生奉仕の浦安舞が奉納された。

この頃から雨が降り始め、春雨の煙る境内に雅楽の音が響き、崇敬者多数の玉串が奉られて、祭典を終了した。

引続いて先般当社に名刀「則光」を奉納された中村吉兵衛氏に感謝状と記念品が贈呈された。

翌二日、午前十一時より春祭り第二日祭が執り行われ、祭典終了後、皇室に新春の若布を献上すべく今年の厳冬に玄海で若布を採取した高令者に感謝状と記念品が贈呈された。

また、午前十一時四十五分から宗像郡護国神社神前に於いて、同社春季大祭が斎行された。

祭典は郡内遺族の方々始め、各町村長、各町村議会議長、氏子会長、総代など多数参列の中、約二百名が参加し、日頃の修ム、みたま安かれと、護国の英霊に対して奉謝の玉串が奉られた。

三日間に亘る春の御祭りは、このように厳粛裡に斎行され、一方神賑行事も盛大に行われた。

なお神賑行事として恒例の奉納剣道大会が、四月六日（日曜日）午前九時より境内本殿脇にて行われた。

前日夕刻よりのはげしい雨のため一時は会場を変更しなければならないかと思われたが、当日は大会開始の時間が近づくにつれて次第に空は晴れあがり関係者をほっと安堵させた。

大会には剣道をはじめたばかりの小学生から一般まで四十二チーム、約二百名が参加し、日頃の修練の技を競いあった。境内は四時すぎまで気合のはいった掛け声がひびき、参拝者からあたたかい応援が続いた。

（写真は拝殿での浦安舞）

◇

奉納剣道大会成績

（団体戦）

小学校低学年の部
第1位、玄海小学校A

小学校高学年の部
第1位、玄辰館

中学校の部
第1位、玄辰館

高校大学の部
第1位、東福岡高校A

一般の部
第1位、玄海町A

剣道大会表彰式風景

神具、装束
結婚式場用品
株式会社　井筒
九州店　福岡市吉塚一丁目三番三号（〒八一二）電話福岡（九二）六五一九四五六番
本社　京都市下京区油小路八条北入（〒六〇〇）電話京都（三五）三四一一代～四番

恒例の春まつり

〃徳山宗像神社祭斎行〃

出光興山㈱徳山製油所構内に鎮座します宗像神社の恒例の春季大祭が、四月五日当天社奏父祢宜以下、職員巫女奉仕のもとに斎行された。

陽春の桜花薫る境内に於て、浦安舞を舞う巫女の姿も清々しく、楽の音も優雅に行われた。

祭典は、長野所長はじめ、役員並びに出光協力会員、新入社員等百七十余名参列のもと、午前十時に開始された。修祓、祝詞奏上の後、浦安舞を奉納、次いで関係者の玉串奉奠がなされ、盛大に祭典を終了した。これに先だって、午前九時四十分出光石油化学工場に鎮ります、宗像神社春季大祭も斎行された。最后に同社大浦油槽所の小高い丘に奉鎮されている宗像神社の春祭が斎行された。

この丘より望む大浦湾の美しさは、一幅の絵の様である。又この油槽所は特殊装置が施された近代的な工場で、現在も十万トンオイルタンクの建設が続けられている。

祭典終了後春田油槽所長の御案内で工場内を見学した。金員は製油所の精密さにあらためて、驚嘆しながら心を残して製油所に別れを告げた。

論説　孤独と清潔の中の信仰

今の混乱分裂の世情の中からは、とても言挙げできない文句「神州清潔の民」を、ルバン島やモロタイ島から生還した人たちに当てはめて、その孤独と極限の姿を観察してみる。

さき程参議院議員を志して落選した愛知県の横井庄一氏が二十数年で、ルバン島の小野田寛郎氏とモロタイ島の中村輝夫氏は共に三十年に及ぶ。横井氏は孤島生還の名声を基盤として、周囲につかれたが、自ら政治に意欲を燃やしてか、俗世にその精神生活を戻しているので論外。中村氏は台湾人で日本兵となっての気の毒な孤島生活であったが、日本人本来の民族意識とは縁遠いので措く。

ここに孤独と清潔の中の精神生活、特に信仰の点にふれてみたいのは小野田氏の場合である。彼は祖国の土を踏み、老いた両親始め郷土の人々の温情に接して感激し、昔からの鎮守の森に祭礼を見て歓喜し、困苦に堪えて生き抜いた幸運をしみじみと味わったであろうが、世情の実態が漸次わかってくると、孤島での神州清潔の民の生活とその堅い信条が許さないものを見つめはじめた。

それが彼をブラジルに渡航させ、そこに永住の決意を固めさせるに至った。ブラジルに同胞が居たためではない。マスコミの賞讃や官民多数の歓迎に甘えたのでもない。まして広大な新天地の生活に野心を抱いたのでもない。

父母います国日本に失望したからである。繁栄という名の物質偏重、自由という名の権利闘争、それが彼をして又しても海外に去る心情へ動かした要因である。

小野田氏は、祖国の土を踏んで祖国を失った、再び日本で日本人と会って日本を知ることができなかった。孤島で持ち続けた清潔な心、生死を超越して守り続けた純一な信仰、それが汚濁混乱の醜悪な祖国の現状を見て、祖国を亡くしてしまった。日本を失ってしまった。悲しみの極みである。

孤独と清潔に宿る信仰は、古代人の純真な先祖祭りを思わせる。父祖の恩恵と自然の天理を尊崇する古代人に、後世の俗信仰に見る私欲から出る財物願求の祈りなど少しも存在ない。孤島での原始的生活は、古代人の純真な先祖祭りと同様に、清潔の民の心境であったに違いない。

戦後は終っていないという言葉をよく聞かされる。三十年経って帰還する人、やっと集収される遺骨、戦後はなお続いている。

先日ビルマの遺骨集収団派遣の趣意書が送られてきた。想起したくないがビルマ戦場の凄惨な敗走が浮ぶ。この方面の兵力三万の内、十七万の犠牲者を出した。犠牲とは本来喜んで生命を捧げる意味ではない。刑国の信条はあっても、犠牲であった。一将の名誉欲功名心から出た無謀なインパール作戦、枯れた方骨が弓雄の私欲の犠牲となった場合、古今の歴史みなその軌をこにしている。

多数の犠牲をいとわぬ豪雄は、いかに出世しても名声を博しても、清潔の民ではない。極限におかれた者が持つ信仰に比べると、その片鱗も持たぬ不潔さがあった。

どこの国の歴史にも、不潔の野望を抱く者が国政を誤り災厄を起している。その火の粉を被った国民は塗炭の困苦に呻吟した。それがどの国でも民族でも、歴史の回転が持つ宿命と片付けてはならない。孤島の残留者も、密林の遺骨も再あってはならない。

清潔の民の目は遂に祖国を見出し得なかった。小野田氏は余生を送る地をブラジルに求めた。かって無事を祈った両親も、助け合って生きた友人も居ない別天地であるが、彼の選んだ方針はまことに立派である。地味ではあるが実しさを感じさせる。それはある意味で、昔千軍万馬を往来した勇将が出家した心境とも観られよう。

去る二月、ブラジル水住手続きのため二時帰国した彼は、再び週刊誌に感懐を述べている。

「自然の中にいるのが一番いい。自然は不便でも正直だ。日本がわかれば、よけい腹が立ってきた。日本は無節操な国だ。一億玉砕しようと言って人を騙し、三百万も殺した。一億総裏切りではないか。こんな国には住めない」と。痛烈である。

玉砕を暗とした国魂は、常人の日常では測れない。危険も飢餓も超絶した極限まで追い込まれても、不変の精神を貫いた人が、今日の日本に怒りを持ち希望するのも、孤独と清潔の中に三十年に及ぶ強い信仰があったからであろう。

阿蒙少言

現代人にとって最高の贅沢は何だろう。騒音と色彩にわずらわされて、いつも何かの刺戟剤に苦しそうに生きる都会人が、全く失っている貴重なものが、今日では得がたい静寂と暗黒であろう。と思後の山村の宿に泊った新聞記者が書いている○都会で得られぬこの境地は、最高の贅沢かも知れない。ところが、その有難い自然の恩恵では眠れないと云う。不眠症になる、静かすぎて暗う過ぎて、かえって不眠症になるとする。その不眠症を都会で得られぬ最高の贅沢だ○都会から失われた貴重なものは、もう都会人に用はない。いや、都会人の病気の因とあっては大変である。騒音迷彩をの他さまざまな刺戟、その中での気ぜわしい仕事、神経を使う対人関係の面倒に適合してればとても山中の宿の物音一つ聞えない夜は、不眠症や神経衰弱を起す有害な境地であろう○それほど現代人は自然から離れて生きている。自然環境の恩恵は知らなくて自然からも捨てられた脱自然人である。高原を渡る風、その中に芽ぐむ野草、そこに人生を静かに思う余裕などはない○追っぱり追っかけられたりの物欲倍増の生活に慣れた都会人とはいえ、休日には郊外に出たがる。又シーズンの往く先には娯楽の施設がなければならない。静寂と暗黒の自然など求めてはいない。記者の書いた最高の贅沢は、とても耐えられず、病因ともなりかねない○自然美を失った現代人、食べ物にもそれが言えよう。調理が研究されて、新しい食料が工夫されて、口舌を楽しませる技巧の料理は良っているが、山菜の自然食の美味は知らない○イヤリングの次に、鼻輪の流行も想わる時勢ではある。（白雲）

第一六五回　宗像大社歌会詠草

毎月五日ノ切　詠草到着順

福岡市　梶木　州児
神前に孫子等揃え謝しまつるわが金婚の幸賜へるを

武丸　原田まつ代
水温るむ池面に古木の梅の影みだして緋鯉潜りに潜む

東郷　藤崎　辰子
二三日遅るる吾の訪れをさびしむ母の老が自に見ゆ

清水市　鷲津かつ代
白銀にかがよふ雪の富士が遥をまぶたに彫（ゑ）りて去りゆかんとす

宗像　中村　幸
門出づる誰に吠ゆるや犬の声深に障子は白みゆくなり

津屋崎　占部　由久
音もなく降る春雨に色づきて桜の菅日々にふくらむ

田熊　岡部　緑陽
神苑の樹々の雨垂れしめやかに心しむまま去り難く佇つ

城南ケ丘　早川須磨
春潮の白くしぶける防波堤魚釣る人の竿のゆらげり

八幡西区　安川浄生
海鳴の日すがら止まぬ寒き浜渡り鳥の群とびゆくが見ゆ

田島　吉武　武雄
不自由な矢に寄添ひ脱衣させ湯舟に誘ふ妻の床しき

曲　天野トモエ
庭に咲くラッパ水仙人目引き見知らぬ人に黄いろきを摘む

田熊　力丸　一郎
初に見し淡路舞子をまのあたり春吉日の夢も残りぬ

徳重　石松やす子
去年の秋団地に憑きし三毛猫は何れの家に養われいむ

鐘崎　村田　四郎
磯辺より導くに展ける高原照る日をうけて小刻みに揺ぐ

田久　立花　勇雄
早春の山の斜面を這う知ノ杉苗植うる人影の動く

田久　小方　実
冬ながら腕豆の花咲く祈宿のあたたかき街にバスを降りたつ

津丸　松尾　豊
病院へ訪ね来し妻の手荒れをそれとは云はずソット触れみつ

通堂　木梨よしの
彼岸桜六分咲いたる境内に雅楽流れて森はかそけし

田熊　今村　重刀
御詠歌をながす遍路の声潜め花吹雪散る山のみ寺に

宮司　片山　一
癒いまま梅樽の実にむさぼれる秀による鵯群れ枝を埋める

白木うめの
孫の手が細かくすばやく折る紙のつやめきし一対の雛となりたり

福間　宮木　ナカ
白垢の花嫁御寮の清らかさ木を埋めつくすこぶしの花は

名残　竹原　圓
早春の植木市場で売られゆく梅に苦みのふくらみている

津屋崎　内田　久美
境内の草の芽摘みて夕餉せむ去年植えし三葉の芹和びるぬ

福岡市　桜井　ツ子
里にゆきし幼のあき袂布を縫ふ戻る日までには仕上げむものと

深田　中野　節子
昨日時きし人参の畑踏み荒し群れある猫にまじる我が猫

大井　吉田ますみ
夕凪の海静かなり玄海の遠き島々春霞みして

冨地原　山田　高野
綱張りて若布干いる女の面に波は春の風送り引く

原町　八波　五月
はな吹雪大湾を見下しぬ真珠育くむ海の蒼さよ

福岡市　吉田　信夫
合格の発表を聴ひと時の苦しきまでに祈る心よ

戸畑　田中　初男
潮引きし中洲に遠く鴨の群皆飛び立ちぬ午後の陽さに

津屋崎　麦野　時雄
大陸より吹き来る風が運びたる黄砂ひろく可花霞のこと

武丸　立石ろせ乃
心字池の橋ふみ渡りゆくわれに水面をけりて鯉の群れ寄る

◇復興工事進展◇

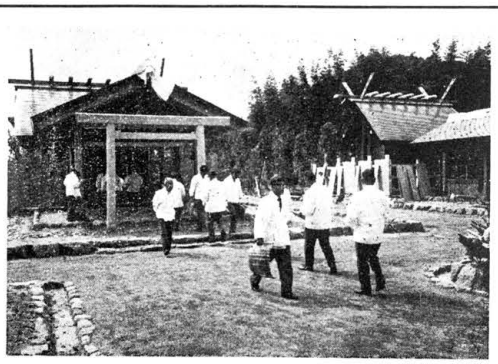
第二宮・第三宮社殿完成

――お白石持行事に総代奉仕――

第二宮・第三宮復興工事は、予定通りの順調な進捗を遂げ、この程両宮社殿を覆っていた葦屋根がとりはらわれて、その全貌が明らかとなった。カヤ葺き独特のふくらみを型取った銅板葺の屋根に乗せられた千木、勝男木には燦然たる金箔押しの飾金具が取り付けられ、陽光に照り映えてまばゆいばかりである。幌舎、瑞垣、鳥居も総べて合檜材により、伊勢の別宮と全く同じ佇いに再現された。

こうして略々社殿の建設をえた四月十八日、伊勢神宮式年遷宮の折、執り行われる「お白石持行事」にあやかって、郡内氏子代表による境域内の石敷き奉仕が行われた。当日朝九時、代表者（評議員）四十名が神社に集合、全員白の上衣に身を正し、拝殿に於てお祓いを受けた後、第二宮、第三宮に参進した。そうして瑞垣内と幌舎内に県内刈田地方の清流で採取した径二～三糎の白い小石を敷き並べた。この作業には神職、巫女も加わり、新殿への敬虔な祈りをこめて真摯な奉仕の赤誠を捧げた。瑞垣、幌舎の外には、五～十糎程の白石を敷き詰め、午后四時に奉仕作業を終えた。奉仕員は年配の方が多く、その疲労が気遣われたが、「御垣内までお入りして御奉仕でき、これほど有難いことはありません。このような立派な御造営のときに選ばれましたことは非常な光栄であり、今日の御奉仕は生涯忘れられない感激です」と、みなさん晴々とした面持であった。

御造営は五月上旬には全工事を終え、来る五月二十日夜遷座祭奈行の予定で、目下その準備が着々と進められている。



お白石持行事にいそしむ氏子総代

王子神社春祭

宗像郡のほぼ中央、宗像町大字王丸字許斐の地に屹立する許斐山（標高二七一米）の頂に、鎮座されている神社の春祭が、四月三日地元民参列のもとに斎行された。

王子神社は、特に当社と因縁深く、辺津宮境外摂社として古くより毎年例祭日には当神職司祭のもとに祭典が執り行われている。

この日は前日の雨もようすばらしい好天に恵まれた。うっそうと茂る雑木林の急坂の小道を登りつめ山上の祠に到着。

祭典開始、国家の安泰と氏子諸人の平安無事と弥栄を祈念し本年度の祭典を終了した。

沖中両宮関係工事進む

――孤島に新社務所完成――

沖津宮社務所が三月末日に完成し、当社に引き渡された。春任者は四月より新装なった木の香も新らしい社務所に入居し、祭儀に精進している。

新社務所はステンレスの屋根に桧立羽目張りの外装。居内は、潔斎場、応接室、和室二間、食堂と各室独立した設備を有している。外部施設も、永年の懸案であった水道工事が同時に完備され、これにより離島の生活の不便さが一挙に解決された。

同社務所建設にあたり、昨秋より不便な地で工事を担当された、施工大工大島在任勝田幸利氏、伊藤鉄工所（株）（石津文徳社長）を初めとする関係者御一同に紙面をもって感謝の辞を表します。

また中津宮照海殿は三月十三日に、職舎の方は四月十日にそれぞれ上棟祭が無事斎行され、現在完成を目ざして着々と工事は進んでいる。島民は四囲にこだまする槌音を朝夕聞きながら完成を心待にしているようである。

宗像郡消防本部発足す

――広域消化活動に喜びの声――

宗像郡消防本部が四月一日に発足した。本部消防署を宗像町田熊に、分署を福間町に、分遣署を大島村にそれぞれ同時に発足した。

近年のベットタウン化の波により郡内には、団地が林立し人口増大の一途をたどっている。それにともない火災をはじめとする諸々の災害も増してきち、防災活動の広域化は地域住民永年の念願であった。

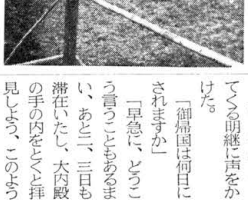
以前から設置されている各村独立の消防団も従来通りの防災活動を行なっていくが、今後「一一九番」への第一報はすべて本部に入り、本部より同時に各消防団へ出動の指令が行くことになる。防災活動が広域化され便利になった反面「いたずら電話」も増加したとのことである。消火を遅らせるいたずら電話は絶対にやめたいものである。

うこん桜

満開に咲きそろう

花弁の色がうす緑のいわゆる「うこん色」をしている桜である。他の桜がちりかけた四月中旬頃に咲きだす遅咲きの桜である。二年目の今年は、良く咲き参拝者の目を楽しませてくれた。

この桜は昭和四十九年正月に宗像大社菊花会理事田代定氏が飯塚市の麻生家大浦荘のうこん桜をとり木し奉納されたものである。



◇御案内◇

第二宮、第三宮遷座祭

△祭典▽

五月二十日（火）午后八時遷座祭

五月二十一日（水）午前十時～十二時遷座奉祝

△神賑行事▽

五月二十一日（水）風俗舞、浦安舞奉納

訪欧猫の弁

外遊雑話　猫も杓子も（1）

海外旅行熱は年毎に盛んになってきた。韓国・香港・グワム・ハワイ等は、最近海外旅行の対象にならぬほど、遠方各国へ日本語が乱れ飛び有様。大国相手の無謀な戦争に一敗地に塗れて、絶望と飢餓に泣いた三十年前の亡国ムードなど、夢のようである。

観光企業や旅行会社の数も増えて、宣伝上手のスタッフがあの手この手と誘い出す。昔は一流商社員か学者が、外交官の外に洋行なる特殊語を使って海外に渡航したくらいのものであった。洋行帰りは珍しかった。船来品が田舎者の目を驚かす光景も少くなかった。

現代はちがう。飛行機を見る機会も減多にないような山里の爺婆まで、団体募集の誘いに応じて、風心を寒うさせるものがある。調子に乗らぬ達眼の人は、じつと海外の情勢を観望しつつ、弥次喜多の東海道膝栗毛なぞ浮れ気分に苦笑もあろう。

さて、海外旅行者猫も杓子にしては失礼であるが、辞書には、だれもかれも と話称されていて、別に軽蔑の意味は含まれていない。物好きに一般用の国語辞典をはじめ故事解説書など二三調べてみたが、猫と杓子が列で因縁は見当たらない。

そこで推究センサクとなる。どうもこの語は江戸時代の芸間に源語句となって愛用されたと見た。たしかに庶民の臭いがある。

何が物珍しい行事か、往来をにわかに沸きたたせる。丁稚小僧まで大声ではしゃいで人を呼ぶ。裏に住む隠居婆が猫を抱いたまま、表へ顔を出す。台所で炊事に余念のないおさんどんも、騒ぎを聞いてあわてて杓子を握った姿で飛んで来る。列で家人の見物像に、猫と杓子がまじる。こんな風景は、一匹となって、三週間に七ケ国を巡歴したのだが、文学通りの猫杓子時代ゆえ、格別の土産話があろう。このセンサク脚色が当っているなら、女子大学生四十名と同行した点である。

若いお嬢さん学生にまじって、七十翁の半句先生は人が羨やむ華やかな旅を楽しんだ。週一日の講義ではあるが、もう十年続けた余徳かも知れない。話す方も聞く学生もあまり面白くない科目である。古事記や日本書紀等の古典に現れた古代民族思想、奈良平安に亘る律令格式の変遷沿革、特に平安の延喜式は古典国語に至って、多くの学生の居眠りを誘う。それでも半句先生は、週一日のお嬢さん相手の講義を、若返り法のサイたるものと心得ているようである。

旅行会社が各大学の研修旅行機関とタイアップして、全国学生海外旅行研修会を組成した。然し、旅行中の事故も少くないので、各大学とも先生は参加しない「殊に女学生の旅行団に同行するなど、よほどの唐変木である」と敬遠された。半句先生は「その唐変木はわが輩である」と、敢えて一学生の身分で申込んだ。利巧な先生の多い現代、たまには間抜けの唐変木もあってよいと。

（風来子）

火の山　その三

こうのかなと　神湊

（48）

楠早鳥作
福田長庵画

翌朝、赤間関には大内の兵が充満した。九州の政変に備えて弘世が山口から召集した兵である。探題のもとに帰る義弘を送りに唐泊まで出た氏俊は、その動員力に驚歎した。

一夜にしてこれだけの大軍を集結させるとは！

と、同時に大内弘世の九州計略に対する並々ならぬ野望を肌で感じとった。

義弘を探題の側近におき、そこから流れる情報により如何なる状況の変化にも対処する体制はこれしかあるまい。

「とたんに騒々しいことになったな」

氏俊は後からついてくる明継に声をかけた。

「御帰国は何日にされますか」

「早急に、どうこう言うこともあるまい、あと二、三日も滞在いたし、大内殿の手の内をとくと拝見しよう、このような時こそ相手の器量も判ろうというもの」

これをうけて明継は応えた

「左様、宗像の方へは昨夜、変事の報せを出し、国境いの警戒を厳にするよう伝えておりますが故、領内のことは別に御懸念はおよびますまい」

その日の夕刻、再び招宴が弥太の邸で催された。前夜と同様に碧眼の女人の接待をうけ歓談している間に、弥太が宗像より仕入れる鮑燒酎が京ではことの外、珍重がられ、高価な取りひきをしているが何処で入手されるのか聞かせて欲しいがと問うた。

「別に他処で求めるわけでは御座らぬ、領内の鐘崎と申す所は住古より海中に潜水いたし漁撈をいたす海人の一族がおりその者たちの手によりつくられておる」

と氏俊が答えると弥太は頭を傾かして、その者たちを大内の領内へ入植させ漁師に鮑燒酎を生産する技術を取得させるよう弘世に懇望まで出た氏俊は、その動員力に驚歎した。

しかし、九州に注がれている弘世の目は、国境りに凝集されていたため、大した反応は示さずただ氏俊に弥太のために海士の調達をするための便をはかってやるよう依頼したのみで止った。

これを見て明継は、弥太と言う男に単なる海商から一歩ぬきんでた何者かを感じとった。――この男の智恵を引きだすなら、なにも対外貿易だけに一国の命運をかけあくせくすることもあるまい。領内の植産を盛にし、万が一、幕府の政策により対外貿易が途絶した際、これだけで一国の経営が可能であろう。今から先の領国はそのように作りあげねばなるまい、稀有なすぐれた男よと思い、京へ帰るまい。

明継は心配して、船は何時でも用立てる事ゆえ遠慮なく使われたいと言い、その夜の宴をおえた。

弥太の邸を出ると西の山頂に炎が見えた。

氏俊が指す方を見て明継は闇の中で低く笑い

「今の話で大内の館主殿も、相当あわてた模様です。あれは山口に救援を求める狼火です。昨夜もたいておりました。赤間関に兵が増えれば増えるほど九州は動きがつかなくなりましょう」

と告げた。火の山にあがる炎をみながら明継の想念は頭の中で渦巻いた。対外貿易を可能な限り続けて、その間に弥太をつかい植産を軌道にのせる。他領に海士を入植させ漁業権を獲得する。海産物の加工は凡て領内で行うとすれば今の大船建造既策を変更せねばなるまい。

何時しか炎は消えていた。

☆　☆

「館主帰国の儀につきましては今日、九州の状勢を見まするに、武家方当面の敵であった将軍富崩御ののち、在地の諸豪は切り取り勝手という気運となりましょう。うかうかすれば探題殿も危難に陥るやもしれもあります。嶋津、大友、少貳が如何なる動きを示すかが問題となり申す。三者鼎立のままで行けば探題殿は御安泰、力が寄れば状勢は困難、このような折から一刻も速い帰国をと望んでおりますが陸路を通るは虎狼の巣を渡るようなもの、ただこの変事を聞きつけて一両日中に迎えが来るのを待つのみです」

継が応えた。

「館主帰国の儀につきましては今日、九州の状勢を見まするに、武家方当面の敵であった将軍富崩御ののち、在地の諸豪は切り取り勝手という気運となりましょう。うかうかすれば探題殿も危難に陥るやもしれもあります。嶋津、大友、少貳が如何なる動きを示すかが問題となり申す。三者鼎立のままで行けば探題殿は御安泰、力が寄れば状勢は困難、このような折から一刻も速い帰国をと望んでおりますが陸路を通るは虎狼の巣を渡るようなもの、ただこの変事を聞きつけて一両日中に迎えが来るのを待つのみです」

弘世は心配して、船は何時でも用立てる事ゆえ遠慮なく使われたいと言い、その夜の宴をおえた。

弥太の邸を出ると西の山頂に炎が見えた。

氏俊が指す方を見て明継は闇の中で低く笑い

「今の話で大内の館主殿も、相当あわてた模様です。あれは山口に救援を求める狼火です。昨夜もたいておりました。赤間関に兵が増えれば増えるほど九州は動きがつかなくなりましょう」

と告げた。火の山にあがる炎をみながら明継の想念は頭の中で渦巻いた。対外貿易を可能な限り続けて、その間に弥太をつかい植産を軌道にのせる。他領に海士を入植させ漁業権を獲得する。海産物の加工は凡て領内で行うとすれば今の大船建造既策を変更せねばなるまい。

何時しか炎は消えていた。

☆　☆

大社山林緑化に着手

植樹祭斎行

福岡市と北九州市の中間に位置し、白砂青松で名高い宗像の海岸線も近年猛威を振う松喰虫の被害をうけ樹齢六、七十年の樹が次々に伐採され、切株が痛ましく目に映る有様となった。この二、三年来これが内陸部にまで蔓延し大社周辺の山々も点々と緑が赤褐色に変色をはじめた。このため所々に点在する松山は凡て全滅の状態となり関係者を憂慮させた。

大社保有の山林もこの例にもれず、とりわけ大社前面の下保運山と高宮北側の山林の樹齢四十年を数える松木も再三に亘る防除作業の効もなく枯死した。

これにより大社としては史跡地内の環境保全のため、玄海町より国庫補助の適用をうけ松苗四千五百本の植樹を計画しその植樹祭を三月六日に執り行った。

当日、地元総代、神職、傭員、総勢四十名は拝殿前に整列し、神前に松苗を供え、

「培ひし樹々は風吹くとも倒れ傷ふ事なく、昆虫の災なく直々と伸び繁り栄えしめ給ひ――」

と敬虔な祈りを捧げ、式をおえ各人鍬、鎌を携えて現地に赴いた。午前九時下保運山の胸を突く様な急坂を登り頂上から植樹を開始した。眼下に大社の森を望み、この苗もやがて

植樹にいそしむ奉仕員

はあの様な大樹に育てと念じつつ一本々々に丹誠をこめて植えていった。

午前中で下保運山を終了し午后は高宮北面に移動し、夕刻無事凡ての植樹を終了した。

話題の新車をみる（九六）

ランサー・セレステの巻

三菱自工・三菱自販は、二月二六日、従来セダンタイプのみであったランサー・シリーズに、ハッチバックスタイルの新型乗用車、『ランサー・セレステ』を追加し、三月一日より発売を開始した。

セレステ（Celeste）とは、空の青色を示すラテン語で、機能と美をマッチさせた爽やかなクルマということから名づけられたものだという。

これまでの2ドア・4ドアのセダン系のランサーに、そのシャーを共通とするファッショナブルなハッチバック・クーペを架装したもので、このクラスのハイ・パーソナルカーを狙ったもの。

エンジンは、セダン系と共通の一四〇〇と一六〇〇を搭載すると共にギャラン一六〇〇MAと共通の低公害サターン・エンジンを積むセレステ一六〇〇MCA・GLも新たに設定され低公害車のバリエーションを広げた。

機種は、一四〇〇CCが九二PSエンジンでGL（四段ミッション）とGSL（五段、一六〇〇CCが一〇〇PSのGL（四段）とXL（五段）、ツインキャブ仕様で一一〇PSのGSR（五段）、加えて五十年規制パスのMCAⅡBエンジン仕様のMCAIGL等がある。

スタイリッシュなロングノーズ&ファストバックのサイドビュー＆ファストバックのサイドビューまたロー&ワイドセクションのプロポーションは、車体まわりのスムーズな空気の流れ（空気抵抗を小さくし）や横風の影響を最小限に押え、秀れた走行安定性を示す。

ボディシェルには、エアダムスカートがフロント・スカート部に付けられ、悪路走行時に於ける泥ハネ特性の改善がされている。

責任役員会開かる

――本年度運営方針決定――

昭和五十年度の予算審議を中心とした、当社責任役員会議が、去る三月二十七日当社会議室に於て開催された。

尚片岡道信、吉本弘次両役員は諸般の都合により欠席した。

まず出光弘前役員の後任として、出光泰亮役員の新たな就任を可決承認し、予算審議がなされた。

昭和五十年度、社務本局予算は、昨年来の狂乱物価の影りを受け、歳入に対し各課請求の歳出のみが大きく膨れ上ったため、経理課であらゆる面の節約を検討し、前年度を若干上回る予算案にまとめた。これについて各役員から御社入並びに歳出について厳しい意見がなされたが、この案に承認された。

この後社務報告として葬津宮司より、沖津宮社務所の建設をはじめ中津宮照海殿並びに社務所の建設辺津宮での第三宮・第三宮の再建事業の進捗状況等に合せ、中津宮奉賛会による一千余万円にも及ぶ奉賛金の募金がなされたこと又、リヤ・クオーターには斜後方視界に有効なシースルーウインドウが設けてあり、エア吹出口も兼ねて、想像以上に視界がよい。

多用途性を高める第三の扉、リヤ・ゲート部はギャランFTOでおなじみのクオーターフィンをもつファスト・バック（ハッチバック式）を採用。

インスツルメントパネルおよび内装はセレステ独自のデザインで運転席はよりスポーティにまとめられている。

ランサーをベースにしたシャシーは、フロントにストラット/コイル、リヤにリジット/リーフのサスペンション、全車に前輪ディスクブレーキを装備している。

〝省資源・省エネルギー時代にマッチした低公害多用途小型車〟セレステには数多くの利点が施され、今後の期待がかけられ得よう

宗像大社菊花会理事会開催

――役員改選行わる――

宗像大社菊花会では、去る三月三十日本年度第一回の理事会を開催し、今秋の西日本菊花展をより盛大に開く様、種々の意見交換があり本年度の運営方針が決議された。

発足五周年を迎えた宗像大社菊花会は、会員相互の親睦を図り、菊花趣味の昂揚、栽培技術の練磨研究、斬道の普及発展に務めると共に、花を愛するゆとりある人心を育成し、豊かな家庭、和みある地域社会、平和な国家建設への一助になることを目的として花展出品地域の拡大、会員理事の増加等年々段階的発展をとげてきた。

本年特筆することは、長崎県佐世保菊花会々員百弐拾名、佐賀菊花会員有志、地元宗像郡菊花愛好者八拾名の新規入会であろう。このことにより西日本菊花展が名実ともに九州最大の菊花展となったわけである。

この日は本年度運営方針並びに花展出品規約の改正最終案の審議と役員改選の件が討議され、方針規約の件は前年度反省会の議事録を骨子として進められ、又役員の改選は現役員の任期切れと新加入会員の増大により新体制で臨むことになった。なお新役員は下記通りである。

宗像盆栽展開催さる

若葉も萌え始めた四月中旬を迎え城山盆友会では、第一回の盆栽展示会を四月十五、十六日の二日間城ケ谷公民館に於て開催した。

会員の願いであった展示会が、ここに実現したわけである。趣味を同じくする同志の集り、催しは実に楽しいものであり、二十代から六十代という幅広い年令層で構成されているにもかかわらず、務めの合い間に培養した作品を持ちより各々の技術を競い、熱心な意見の交換が行われるなど、意義深い催しであった。

初日は平日ではあったが好天に恵まれ、入場者は引きもきらずめぐまれ、入場者は引きもきらず永年丹精こめた作品の前に立ち並ぶ人々で関係者は場内整理に大童であった。また二日目は小雨模様の悪天候にもかかわらず、主催者側の懸念をよそに陸続とつめかける参観者によって会場は立錐の余地もない有様となった。

かくして、展示会は極めて盛況裡に終了した。会期の延長を願う人や、また会期中にも郡内在住の盆栽愛好者から入会の申し込みがあるなどして関係者を感激させた。

地域社会の融和向上のためにもこの会の健全な発展が大いに期待される。

ミニバスケット交歓大会を終って

――優勝までの苦しかった日々――

第六回全国ミニバスケット交歓大会が三月二十八日から三日間東京都内の三会場で、北は北海道から南は鹿児島まで、三十七チームが参加して行なわれました。

玄海東小女子バスケット部も念願の初出場を果すことができました。学校、PTA、地域の方々の物心両面にわたる絶大なる応援を背に必勝を期して選手一同上京しました。思えば新チームを結成したのが六年生になったばかりの四月、毎日が練習、そして練習の連続でした。生徒数の少い小規模校が勝ち進むには、ただ練習しかありません。雪のちらつく冬の寒い朝、しもやけの手からは血がにじみ、テープを巻き痛みをこらえながらの姿は痛々しくさえ感じられました。放課後は暗くなるまで、学習に疲れた体をひきずるようにして頑張ってきました。少ないクラブ員の中から、落伍者を出さないように、けがのないように祈るような毎日でした。でも楽しい思い出もたくさんありました。

先生方の好意で作っていただいた幾度かの昼食会、父兄の方々から戴いた数々の暖かい見舞の品、他の学校との親善試合、苦しい練習の合間のくつろいだ一とき等、限りない思い出を胸に秘めて試合に臨みました。しかし、まだやり残した事が多くあるようで不安を打ち消すことができないうちに、いよいよ大会当日になってしまいました。開会式が行なわれ選手が一堂に集まると、どのチームにも大きなのが何人かいて強そうな感じがします。でもいざふたをあけて見ると心の迷いは一度に吹っ飛んでしまいました。コートをわがものとばかりに走り回って攻めまくる選手達、守ってはつけ入るすきをあたえない鉄壁さで相手を寄せつけない強さ、相手が弱いのか、自分達が強すぎるのか自を見張った程でした。一方観覧席でも他を圧する大応援団が余裕を持ってゆったりと応援しているものでした。ちなみに対戦相手と得点は次の通りです。

二十八日

玄海東小（36）対青森県代表（14）

〃（30）対沼玉県代表（22）

二十九日

玄海東小（33）対山口県代表（11）

〃（57）対滋賀県代表（11）

三十日

玄海東小（62）対東京代表（12）

今、戦いを終って振り返って見ると、自分達の努力もさることながら、いつも目標にして頑張る心校区の人たちに感謝の気持と同時に胸をはって報告できる喜びにひたっています。それに増してもの校区や町民の方々からわが事のように喜んでいただき、やって良かったという実感をつくづくと味わっています。願わくばこの先ずっと続け、心と技をみがいて、再びあの勇姿を全国大会の場で見せてほしいと願っています。わが玄海東小にとってもこれからがほんとうの試練です。苦難の道の連続でしょう。しかし先輩がともした灯を消すことなく一層明るい灯となるよう頑張ろうと心に誓っています。

玄海東小学校　上妻徹也

当社にての必勝祈願祭

新役員（敬称略）

会長　高原鹿吉
副会長　伊藤富夫
〃　駒山直次
〃　高田太助
〃　古屋謙助
〃　大平喜代松
〃　橋口武夫
理事長　高島茂人
運営理事　俣野辰雄
〃　佐野功門
〃　杉下松雄
〃　古波蔵正忠
〃　竹内豊
〃　川崎正木
〃　森長命
〃　小沢宗直
〃　新助
〃　川野盛
〃　常岡勇
〃　溝口三
〃　坂本寿一
理事　伊達学
〃　安永喜
〃　田代秀
〃　池上定
〃　福元門
〃　西河直
〃　野上実
〃　矢野田
〃　青谷粕
〃　貞五郎屋
〃　柏木幹次郎
〃　野口八
〃　島村清
〃　岩崎唯一
〃　若松
〃　広渡若
〃　志和健
〃　塩川寿
〃　岡村友
〃　松永弘
〃　吉崎伝
〃　花田栄
〃　田光三
〃　太田雄
事務長　堤可
〃　宏

宗像大社
宗像
宗像
宗像

宗像大社歌会 俳句作品集（二四七）

それぞれの孫卒業を天に告ぐ　田熊　安部　ゆき

滝の音に話し消されて手まねする　土穴　八尋　恒夫

今日は雷明日は桜の花見なり　田熊　力丸　一郎

入試はエピソードがある。

新設まもないとはいえ、全国から俊才が集まる名門校である。必ずパスするとはかぎらないのだが、佐三はほとんど自信があったのか、受験のとき、ふとん衣類など下宿生活に必要なものを全部持っていた。

神戸駅から人力車に乗り、意気ようようと柳こうりをまたにはさんで学校に向った。ところが、急な坂が道で人力車がひっくり返り、畑の中にほうりだされた。土がべっとりと手足についた。「これはいかん。落ちるかも知れん」と悪い予感がしたという。

しかし、難関は無事突破した。

学生時代は、だれにとっても、もっともなつかしく思い出多いものである。社会にめざめ、自我にめざめ、世界観と人生観の基礎が固まる。歩むべき人生の方向も、この時代にほぼ決定されるといっていい。

佐三は水島興也校長らすぐれた先達から多くのものを学ぶとともに、学生が出身地別に分けて切磋琢磨させる「友団制度」やボート部での練磨、精神修養のための参禅、下宿生活などを通じ、独自の境地をひらき人間を形成していった。

筆者は、学生時代の佐三に決定的影響を与えたものとして、三つの要素をあげたい。第一は日露戦争後の黄金崇拝の風潮にたいする人間尊重の教育と内池廉吉教授の商業論、そして第三が佐三自身の悩みと思索である。

これらが練り合わされ、佐三の中で凝結していく過程をたどるのがこの章の目的である。また、時代的背景にふれたい。

明治三十七、八年の日露戦争は、世界の強大国ロシアの南下政策にたいし、近代国家としての骨組みをどうやら整えたばかりの日本が、決死の覚悟で立ち向かった国土防衛のための戦争であった。

戦列に加わった兵士は総計百八万人、全国の壮丁がほとんど根こそぎ動員され、うち十二万人が戦死した。戦費は陸、海軍合わせて十八億二千六百万円、当時の国家予算の七倍余りを使った。もちろん、国内で調達する力はなく大部分を英国、米国で発行した外債でまかなった。

ロシアは日本にたいし、人口で三倍、歳入で十倍、常備陸軍で七倍半、海軍で約二倍、といった国力を持っていた。開戦の報が入ったとき、ロンドン市場では日本の公債相場がいっきょに暴落した。日本にたいする当時の国際的評価がうかがえる。

それだけに日本は、日清戦争後の三国干渉、それに続く「臥薪嘗胆」十年の間に蓄えた力をしぼり切った。奉天会戦、日本海海戦での勝利を機に、やっとの思いで講和への道を開いた。

佐三が神戸高商の門をくぐった三十八年四月、奉天会戦（三月）の勝利の余熱がさめきらず、東郷の率いる連合艦隊が朝鮮の鎮海湾で、ロジェストウェンスキー提督のバルチック艦隊東洋回航を、かたずをのんで見守っているところであった。日本海海戦（五月）を経て、ポーツマス講和条約が調印されたのは八月である。

明治時代を高く評価する人は多い。日本人、日本民族のすぐれた点が最高度に発揮され、巨大なエネルギーとなって奔騰したからである。こうした奔騰がなければ、戦争にも勝てなかったし、産業、文化の目を見張るほどの開花はなかったであろう。

しかし、それも日露戦争をピークとしだいに下り坂となり、随性の大正時代を経て日華事変、太平洋戦争へと突入していく。

日露戦争までは、まだ武士道が生きていた。旅順攻防戦のあと乃木将軍とステッセル将軍との会見のもよう、東郷元帥が、ロジェストウェンスキー提督を病院に見舞ったときの姿勢、さらには松山などでの捕虜の扱いかたには、清廉で人間的な武士道の精神と作法が脈々と流れている。昭和の日華事変、太平洋戦争ではみられないものがある。

日露戦争に勝ったことが、日本人を変えた。

戦勝によって日本は、賠償金こそ得なかったが、南樺太を割取し、日清戦争後の三国干渉で放棄した遼東半島の租借権、南満州鉄道の権益を譲り受け、さらに朝鮮を保護国とした。いわゆる「大陸経営」が始まり、日本資本主義は日清戦争後の産業資本確立期から独占資本形成の段階にさしかかった。

三井、三菱、住友、安田の四大財閥が形成され、繊維産業が躍進し、重化学工業にも拍車がかかった。労働問題、社会問題が深刻になり、四十年には社会政策学会が発足した。四十三年には幸徳秋水らの「大逆事件」が起った。

社会の価値の尺度は、武士道精神から黄金へと、急速に変わりつつあった。

一方、国民の間には「軽佻浮薄」の風潮が広がった。男が化粧し、女は「ひさし前髪、二百三高地まげ」をゆった。風紀が乱れ、中学生に性病がまんえんした。いわゆる「明治五疫」の世相である。四十一年には風紀作興、勤倹質朴をすすめる戊申（ぼしん）詔書が出される始末であった。

阪神地方は、こうした風潮のもっとも激しいウズの中にあった。商工会議所の会頭が学校にきて「学校の先生なんかダメだ。金さえもうければいい」と講演した。

佐三はこうした変化を、冷ややかに、批判的にみていた。宗像の風土に育ち、父母から「働け、そして質素に暮らし、人のために尽くせ」と教えられた佐三にとって、黄金崇拝、金もうけ第一主義の世相は、とうてい融け合えない性格のものであった。

佐三は語っている。

「これはもう黄金万能の形で、金さえあれば何でもできる。金持が金のあるにまかせて、学生からみてけしからん行動をさかんにやる。

そこでわれわれ学生は、社会は人間が作ったものであるから、あくまでも人間が中心でなければならん。金が社会の中心で、金さえ持っておればあとはどうでもいいという社会はけしからん」というようなことを言い合った。

これは純情な学生として当然のことであった。天保八年（一八三七年）八十八歳の生涯を閉じ、仁孝天皇から「普門円通禅師」の号を贈られた。

詩文、書画など多くの作品を残しているが、とりわけ画はとぼけた味の中に禅の真髄を表現しており、禅画としてもっとも有名である。

佐三が仙崖と出合ったのは福岡商業を卒業するころである。月を指した布袋（ほてい）の子供を描き「を月様幾つ、十三七つ」と書き入れた画に一目ぼれし、父松寿翁にねだって買ってもらった。

佐三にはもともと、親ゆずりの絵ごころがあった。それが、仙崖の画をみて直観的に「悟り」をさせ、禅の境地に導く糸となった。

門司で創業してからも、旅行から帰ったとき、仙崖の画が二つか三つ届いていないと非常さみしさを感じた、というほどのほれ込みようであった。学生時代の佐三の悩みに、とりわけこの「指月布袋」の教えが大きな支えとなったであろうことは、容易に想像できる。

導く高い目標を掲げ、自らをはげましながら困難と挑戦し、克服していく。布袋がひびかす道を、佐三はひたすらに歩くことになった。

三つの教訓

佐三が四年間の学生時代の思索を通して得た結論は、第一に「愛情によって人は育つ」という家族温情主義の考え方、第二に「尊ぶべきは、金や物より人間である」という人間尊重の哲学、そして第三には「生産者より消費者へ」という商人のあり方、の三つである。

家族温情主義と人間尊重の哲学は、出光興産の人間尊重、大家族主義の経営となって実を結び、商人道は大地域小売り業という独得の営業形態となって実現する。

青年佐三の人間形成に決定的な影響を与えた水島校長は、豊前（いまの大分県）中津藩の藩士の家に生まれた。同じ中津藩出身の福沢諭吉（慶応義塾の創始者）とは、遠い姻戚関係にあったという。東京高商を出たのち横浜正金銀行（東京銀行の前身）に入り、ニューヨーク出張所などに勤務した。

明治三十六年、四十歳の若さで、迎えられて神戸高商の創立にたずさわり、初代校長となった。

ニューヨーク時代に日清戦争、三国干渉を体験、日本が発展するためには人材の養成が急務、と痛感したのが教育界に身を投じた動機という。

ニックネームを「油絵」といった。大柄、色浅黒くぼうっとした風貌から、学生たちがたずねたものだ。「新時代の教養、知識を身につけた士魂商才の実業人となれ」「小事にわずらうな、大事を考えよ」と説き、学生たちの接触を通じ全人格教育を行なった。

知識を切り売る"教"ではなく、人間を作る"育"を建学の方針としたわけである。

できの良い学生にも悪い学生にも同じように"慈父"として接した。

当時、教えを受けた人たちは回顧している。

卒業後に経営していた会社、工場が、関東大震災で被害を受けたとき、突然の舞鶴に受け感激にむせんだ。また、ロンドン支店に勤務するとき、激励の電報を受け取った人もいる。学生、教授たちが校長を敬慕すること、なみなみならぬものがあった。

教授たちも若かった。新興の意気高く、水島校長を中心に全学がまとまって動いただけではないか。それより、一個独立の商人になり、自分の信じるところを行なえ。それが男子の本懐ではないか」とさとされ、父と同じ道を歩む決意を固めていた。

「商人はなくなる」という教授の意見は、佐三にとって青天のへきれきだった。新しい商人のあり方、営業の理念を、必死になって探求し始めたのはそれからである。

「生産者より消費者へ」という理念は、卸し業者を介在させず、小売り業者が直接生産者から仕入れ、消費者に配給するところから出発する。現在でいう流通革命のひとつの形である。

「大地域小売り業」は、これをさらに発展させ、対象地域を全国、またはそれ以上に広げた営業の姿と問い返した。

実際に佐三は、創業当初からこの方針をとったが、資本繰りの悪化を初め多くの困難にぶつかり、倒産の危機に見舞われたこと再三ではなかった。

佐三は戦後苦難時代の昭和二十四年、東京で引退の生活を送っていた内池博士を訪問している。東京商大（一橋大学の前身）のゼミナールで指導を受けた弟計助もいっしょだった。

出光が実現した「大地域小売り業」のあり方を説明すると、博士は「私が考えていたのは出光が全国で唯一の卸し業者として介在し、その下に多くの小売り店を用いる形だった。出光自身が、これだけの大組織で直接小売り業をやるというのは不可能ではないか」である。

西日本新聞社刊・滝口凡夫著

創造と可能への挑戦

―出光佐三の事業理念―

第二章　思索と教訓

神戸高商と仙崖

神戸高商は摩耶、六甲の連山を背に、神戸港を見下ろす高台にあった。東京高商につぐ、全国二番目の高等商業教育の府として明治三十六年に開校している。佐三は三回生である。

四月の主な行事

〔年中行事〕

気温は日一日と昇り、陽光も明るさも強さを増して上旬には南の方から、桜前線が北上して来る。又役所、会社の年度始め、新学期、新入社等と新しい何かが動き始める躍動の月である。

更衣、替衣、改衣とも書く。冬春型の衣服を脱いで夏秋型に改め、夏秋型の衣服を冬春型に改めることをいい、四月朔日、十月朔日に行われるならわしである。

花祭　釈迦降誕の四月八日に行う法会、釈迦の立像を作って、水または甘菜を灌ぐことから灌仏会といわれ、また仏生会、浴仏会、竜華会ともいう、花はその俗称である。

稲荷祭　京都の稲荷神社の祭礼、神興が三月中の午日に西九条の旅所に渡御する神幸祭と、四月の上旬日（三即あれば中即日）に本社に還幸祭とがある。堀河天皇寛治八年（一〇九四）にはすでに行われ、以来その行列も美々しく年々盛んに行われたが、明治維新以後は改暦によって、式日も四月の第二年日を神幸祭、五月の第一卯日を還幸祭と改められたが、稲荷祭は京都の春の重要な年中行事である。

お田植祭　砥鹿神社、小田神社などでは田遊神事といい、香取神宮では大御田祭という、その年の豊作を祈る行事で年頭または田植の直前に行う、早乙女が田楽の拍子にあわせて、苗を植える田植祭の様子が検登等に見られる。

当社の祭事

春季大祭　四月二日、二日

古くは保存会と称され、社宝類の虫干しを兼ねて、一般に社宝を公開した事に始まる。丁度農家では播種期にあたり、一年の豊穣を祈念するおまつりである。尚境内地続きの邢魔国社春季大祭もこの日に斎行される。

王子神社祭四月三日

祭神、素盞嗚命　宗像大社境外摂社、社殿は石祠である。

宗像郡のほぼ中央に屹立する許斐山の頂に鎮座、山麓は宗像町で急速な団地造成で、絶好の登山コースとして、周辺の子供会等の山登りが盛んである。

天長祭　二十九日

終戦前は天長節といって四大節の一つで天皇誕辰生日で祝日。

宣戦、終戦、平和宣言等、多難な歴史を語る現天皇の誕生日を心から祝うと共に、昭和の元号は五十年を数えるに至り、我国元号の最長記録はそのまま今上陛下の御在位の永栄で、心からおよろこび申上げます。